

続「男の嫉妬」

企業経営漫談士 岡野実空

先の本編で女性たちからさまざまな反響が寄せられた、男の「嫉妬」。その「女偏」の熟語は、男中心社会の残滓そのもの。それは元々性別に関係ないばかりか、いまその対象は、人にまつわるあらゆるものに及んでいます。今回の続編では、とかく「嫉妬」的になりやすい、志あるミドルのために、その「傾向と対策」を考えます。

その1: 傾向「増殖」

「嫉妬深い人間は、自らの真実の徳を目指して努力するよりも、人を中傷するのが相手を凌駕する道だ」と言ったのは、古のプラトン。また「嫉妬」をネタに数々の不朽の名作を遺した、彼のシェークスピア。人間の「本性」は不変です。

しかし近代になり、社会の方は一変。多くの人が「技術」や「科学」を活用して「富」を求める一方、それに投資する人々も増加し、「嫉妬」が「成長」の正の触媒として機能する世の中が生まれました。

またその後の「経済」の発展に伴い、さまざまなものがオカネに換算され、比較しやすくなったため、人々の「嫉妬」は「増殖」し続けています。さらにいま情報通信技術の発達で、SNS などをつうじてそれが一気に拡散するようにもなりました。

以上、善きにつけ悪きにつけ、「嫉妬」の根源は、自他の「比較」。実業に携わる私たちは、それが人間の「本性」に由来し、増すことはあっても減ることがないという現実を認識し、社会の中で自分と組織の進むべき「道」を考えねばなりません。

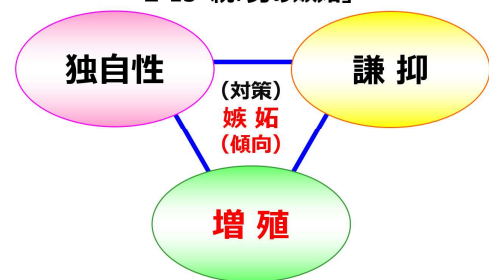
その2: 対策① 「独自性」

さてその王道は、「比較」の対象となりにくい「独自性」の追求。とはいえ「工業化社会」の先人たちにより、すでにさまざまな領域が開拓されています。またそこから「知識社会」に移ったいま、私たちはまず、その基盤である各「システム」と、その「要素」を学習し、理解しなければなりません。

そしてその肩に乗り、社会が求める新たな「価値」を考え、世に送り出します。またそれが実行できるのは、上記の「知性」が備わり、未来の社会を想像できる「感性」豊かなリーダーに率いられた組織。

しかしそのように傑出した個人や組織が、コツコツ型の秀才や、何もしない凡人たちから「嫉妬」されやすいのも、私たちの社会の哀しい現実です。

Z-15 続「男の嫉妬」



その3: 対策② 「謙抑」

そこで必要になるのが、「謙抑」の姿勢。たとえ上手くいっても、「運」に恵まれたと語り、それに関与した人間たちと功績を共有する言動です。また「利他」を優先し、個人および組織の「自利」を抑えることも忘れてはなりません。

とはいえ、元々「謙虚」な我が民族。いまやそれが過ぎ、「臆病」といえることの方が一般的です。そのためここで強調したいのは、「謙抑」と対になる、「義を見てせざるは勇無きなり」。またその欠如が、我が国の多くの組織で「年寄」と「秀才」たちの「傲慢」を招き、事業や組織の変革の芽を摘んで、長年の停滞の要因となっているのです。

さて200年前、「成長」を前提とした社会に警鐘を鳴らした、マルサス。またその基盤である強欲な「資本主義」を批判し続けた、マルクス。その後、「嫉妬」が刺激し続けた欲望は、「成長」という果実と同時に、その負の部分も増殖させ続けました。そして環境破壊を伴う「成長」を諦めざるを得ない現在、定まった市場を奪い合う「競争」の激化によって、「嫉妬」の方はさらに増すばかりです。

最後に、先の本編の結論は、プラトンの弟子、アリストテレスの「妬みを避ける最良の方法は、自分が成功に値する人間になることだ」。それが無理なら、せめてそれに値する人間を見出し、その支援に努めましょう。「人間、できることなら、嫉妬からだけは免れたいものです！」(イアーゴ)

2021年4月5日 実空